

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 10 月号をお送り致しました。



量子は『波でも粒子でもなく、量子である』から始める。とすると、量子は原子のような物質というより、物質の状態を言っていると思う方が、理屈抜きでその状態を認めやすいのではないかな。

どうやら、私自身が思っている以上に物理学者は、物理学という科学の限界を認識していて、『あくまで自然科学であり、自然の状態を、少しでも学問的に深く読み取りたい』と好奇心を旺盛にしている事が分かった。多分、その学問の結果を『工学に活かす』か、どうかは自分たちの領分ではないと思っているのだろうと思う。私が南瓜は栽培できても、まさか携帯電話を作れる訳がない。では何故、これほどまでに物理学に執着しているかは、理屈では説明できない自分に起こる不思議な事が、今やっている事業の根本を為して、その不思議をひとにも活かしてほしいからに過ぎない。

自分に起こっている事は、事実だからそのまま受け入れれば済む話したが、ひととなるとそうはいかない。この世はすべて根本的に量子状態で出来ているので、私に起こっている不思議な事は、ひとにも起こっている筈で、ただその事象の受け取り方がひとによって違いがある。つまり、『光は、波でもあり、粒でもあり得る』という事は、先月書いた『観測すれば粒状態となり、観測しなければ波状態となる』実験結果は事実なので、観測とは何かを考えれば良いだけになる。

此处で言っている事は、ミクロの更にミクロの領域の話。光の素になっている光子(フォトン)は、 10^{-17} のマイナス乗程度の大きさまで現在の物理学では測定可能になっているが、それでもその大きさは計測不能で、ただ『点』としてしか見る事が出来ないサイズの話となる。しかし、私たちは実際にはそんなサイズで暮らしてはいないので、ほとんど無視して日常を過ごしていて、人並みの生活に不都合はない。

ニュートン力学の 1650 年代には、『慣性の法則』や『運動の法則』『作用反作用の法則』だけで、世界を理解して発展を遂げる事が出来、250 年ほど経過した後 1905 年に、『相対性理論』が形作られている。ほぼ同時期に『量子論』の基礎らしきものが、マックス・プランクによって提唱され、更にその 5 年後に当時特許局に務めていたアインシュタインが、『光電効果』の理論体系を発表してノーベル賞を受賞した。光電効果とは、金属の表面に光を当てた時、電子(光電子)が飛び出す現象で、この現象を方程式化して実世界に活かすことが出来るようになった。つまり、光が持つエネルギーから電子エネルギーを作り出し、その関係数値を方程式化したということ。但し、『量子論』はこの理論に入っていない。実に 120 年前の話で、明治 38 年となる。丁度『真空管』が出てきた時期で、私も小学生の頃そのラジオを愛用していた。

前提が少し長くなったがその『観測』が『意識』に当たるとは、そこまでのミクロな世界では人間の『意識』のエネルギーも、影響力として物理力を持つという事になる。不思議な現象とは現代科学で説明しきれない物理現象の事で、先のニュートン力学の及ぶ範囲では影響が無い。量子力学を否定すれば、今、携帯電話すら使えない事になる。ミクロは無視しても生活に影響はないかも知れないが、携帯電話という不思議が使えないとなると、その影響は計り知れない。

数か月前に、人間の脳は、携帯電話と変わらない、宇宙のあらゆるエネルギーを、受け取るデバイスに過ぎないのではないか、と書いた。書いた動機は、ひとから言いつけられた仕事は『やらされ感が強く』やる気になれなくて、自分が思いついた仕事であれば『主体的』に遂行し、結果が著しく変わるという現象を、何故周知の事実として皆が認めるのか、私には不思議だったからである。『意識の力』は無視できない事を周知の事実として認めているのであれば、この力をもっと活用できるはずで、仕事にも充分活かせると思う。

私は高校3年生3学期の体育授業、『剣道』が好きだった。北陸道の南の端、米原の更に少し南の彦根はよく雪が降った。大正期に建ったと思われる講堂に正座し、瞑目する事から授業は始った。森閑とした中で、ひとつだけ、雪が溶け、雫となって落ちる音がする。瞑目とは未だ分かり辛かったが、唯この、いち音に意識を集中すると、私自身と講堂の中の空気は一体化し、ひとつの力といっても良いほど張りつめた。計測すれば、1gのマイナス何乗かの領域で、質量は上がっていたかも知れない。この事実が日常化しているひとつに『黙祷』を捧げるというのがある。物の理を方程式として成立させていなくても、世の東西を問わずこの習慣は存在する。この行為は、魂という名の実態を伴わないエネルギーに対して、自分たちの意識を伝える事になるが、では逆に、実態を伴わない空間のエネルギーを自らに取り込む逆方向も成り立つ事になる。説明不要だが、可視の外に存在するエネルギーと双方向に交信しているので、共通言語は『原子』という事になる。現在の太陽系は第二世代らしい。

第一世代のビッグバンでは、原子の誕生は水素、ヘリウム、リチウム、ベリリウムまで。何と、生命が発生する原子番号6の炭素Cは、この第一世代に誕生した恒星内部の核融合によって生まれ、それが爆発して宇宙に散らばって、その中から私たちが生まれた。ビッグバンで2番目に誕生したHeが3個同時にぶつかって陽子を6個持つ炭素原子が出来た。原子核が6個繋がろうとすると、どうしても3次元にならざるを得ない。つまり立体が初めて出来た。生命体は立体なので、この立体の炭素なくして生命は存在できない。これから先の科学で2次元でも生命と呼べる存在が発見されるかも知れないが、それは今日の議論の外。

『電流』という言葉に惑わされて、電気は電流の中を、蛇口に繋いだホースの中のお湯が、シャワーヘッドから出て来るように、電気も銅線の中を走って来るものと思っていた。『違う』らしい。また思い込んでいた。聞くと、銅線の周囲に散らばっている、別に銅線の近くにだけではないが、空間中に存在している電子が、銅線に沿って電気の状態になって伝わっている。ザックリした説明だが、実際に電子が動くスピードはカタツムリより遅いと言っている。

今は48になる娘が未だ3才の冬、炬燵に3人で入ってくつろいでいた。向かいに座っている母親の、頭の💡が急にピカッと光った。瞬時に私の頭の電球も光った瞬間、左にいた娘の口から『お風呂』という叫び声が飛び出した。今のように沸いたら自動で止まらないので、忘れたら沸騰してしまう。母親の頭に振って湧いた電気信号が、一瞬で私と娘の頭を駆け巡り、その導線まで見えたような気がした。そういえばこの世のリアリズムから遠く離れたところにいる時、仲間が部屋の電灯を『消すよ』と合図をして消した。もちろん瞼は閉じている。そうすると、光の片が、シュワ・シュワと炭酸水の泡がはじけるように消えて行った。花火の光の残りが消えて行く時は無音だが、個体となったPhotonの塊りが、消えて行く音まで聞こえた気がする。

今また、講堂の空気と一体になれば、方向性のみならず、細部にまでビジネス判断は降りて来る。

有限会社アルファー 吉田清一郎